

大宝 和漢朗詠集の魅力

中道 和也

現在、私たちが手にする詩吟教材には、漢詩、和歌、俳句、新体詩などジャンルの違う詩篇が一冊の教材の中に載っています。いつの時代からこのような構成になったのでしょうか。漢詩や和歌が盛んであった平安時代の「古今和歌集」や「和漢朗詠集」を調べたくまりました。

平安時代の初めごろまでは、漢詩集「懷風藻」や和歌集「古今和歌集」など漢詩と和歌は別々の冊子に編まれていました。「古今和歌集」は、遣唐使の時代が終わる頃に、醍醐天皇の勅命により、紀貫之ら4名が編纂した和歌集です。日本には漢詩だけでなく、優れた和歌と、優れた和歌の詠人がいることを、又、和歌は漢詩に匹敵する価値があることを貴族たちに認識してもらったために編纂されました。一方、「和漢朗詠集」は、「古今和歌集」（九〇五年延喜五年）から百十三年後の一〇一八年に編纂された朗詠集です。和歌や学識で有名な清少納言（枕草紙九九六年ごろ）、紫式部（源氏物語一〇〇八年ごろ）や政治家で、権力者でもあった藤原道長さえも一目置いていた藤原公任が、高度な美意識の下、個人的に選択した和歌や漢詩を編纂したものです。その和歌や漢詩は、貴族たちが日ごろ盛んに朗詠していた詩篇、言わば、ヒット詩篇を集めたものです。この和漢朗詠集には、中国の漢詩二百三十四首、日本人が詠んだ漢詩三百五十四首、更に和歌二百十六首が載っています。このことは、日本人が詠んだ漢詩も和歌も中国からの漢詩と同等の価値があることを「古今和歌集」に次いで認めたとする証拠なのです。ここに、現在の詩吟教材の原点があるのです。

「和漢朗詠集」の原本は行方不明ですが、昔から多くの写本と解説書があります。「和漢朗詠集」

現代語訳つき 三木雅博訳注角川ソフィア文庫（二〇一三年）や「和漢朗詠集」川口久雄訳注講談社学術文庫（一九八二年）には文学的・学術的な詳しい解説がされています。たとえば、時代背景、藤原公任の人物、中国の漢詩・日本の漢詩・和歌が互いに共鳴し合うような配置、冊子の装丁などです。朗詠にふさわしい漢詩・和歌の歌謡集であり、漢字と仮名で書かれた毛筆のくずし字体の美しさ故に、朗詠の教材、あるいは書道の教材として時代を超えての人気と多数の写本があり、現在、平安時代の文学作品で残存している写本の中では一番多く残っているのです。

江戸時代の写本である古文書の「大宝 和漢朗詠集」（文政六年一八一三年）に挑みました。「大宝 和漢朗詠集」は、数ある写本の中でも特異な個性を持っています。毛筆のくずし字で書かれた原書の素晴らしさを伝える雰囲気他に、他の写本にはない漢詩・和歌・書道についての挿絵や挿文が添えられています。平安時代の漢詩・和歌の文化と江戸時代の文化の両方を絵本の要素も取り入れた巻之上・巻之下の2冊で楽しめる冊子です。

巻之上の目録は、倭漢詩歌・筆道秘伝・筆法の事・紙の始まりの事・七種の筆遣

いなど二〇目録です。倭漢詩歌の中では、春・夏・秋・冬と分かれています。更に、春では、立春・早春・春興・春夜など一八個・夏では二二個・秋では二二個・冬では九個の詩題に区分されています。たとえば、俳句の歳時記をイメージしてください。立春には、八首の漢詩・和歌があります。一・二番目が漢詩、三番目が有名な和歌「年の内に春は来にけり一年（ひととせ）を去年（こそ）とやいはむ今年（ことし）とやいはむ」（ちなみに、この和歌は古今和歌集第一首です）。四・五・六番目が漢詩、七・八番目が和歌です。

巻之下の目録は、倭歌詩歌・六歌仙・近江八景詩歌・唐詩仙人物・三十六歌仙など十三目録です。倭歌詩歌では、雑のひとつだけです。雑の中では、風・雲・晴・恋・無常・白など四十七個に分かれています。

巻之上の挿絵・挿字は、書道について、筆の持ち方、筆の運び方、紙の作り方、字の形などリアルに説明がされています。巻之下の挿絵は特に面白く、六歌仙、唐詩仙人物・三十六歌仙の絵は個性豊かです。

「大宝 和漢朗詠集」に夢中の中で、私は、はっと気づいたのです。巻之上・巻之下共に、「秀子」と墨のサインがあり、秀子さんのいたずら書きと歌仙に赤色付けをした跡が鮮明に残っています。江戸時代、まだ女子の社会的地位が低い時代にお父さんは、お嫁に行く前のわが娘に人気の「大宝 和漢朗詠集」を与え学問を身に付けさせようとした、わが娘への愛情と、学問に飽きた時にそっと歌仙に赤色付けをした娘ころろが垣間見えたのです。一方、平安時代の「和漢朗詠集」を、藤原公任は我が娘の嫁入りの引き出物にしたとの説もあります。娘が嫁いだ先で、幸せにと願ったのでしょうか。平安時代と江戸時代の父親の娘への愛情が和漢朗詠集に見えるのです。

[会員の近況報告へ戻る](#)

